戦国期本願寺「教団」の形成（研究ノート）

安藤　弥

はじめに

本稿は、戦国期本願寺における「教団」の歴史的形成過程について考察し、論点の提示を行う研究ノート（覚書）である。議論の基本的な軸にあるのは、研究史において次第に示されるに至った、中世真宗史における「門流」から「教団」へという捉え方である。[1] これに関わる論説も今や少なくはないが、筆者なりの理解を説明することもまた、研究史の一段階として必要なことと考える。まず、研究史における理解を整理し直せば次のとおりである。[2]

かつて、親鸞門弟時代の諸集団を「初期教団」と表記する研究史の傾向があったが、現段階では注意が必要である。もちろん理念的に「僧伽（サンガ）」と言うべき実態をそこに読み取ることは可能であるが、教えとそれを恒久的に継承する体制を維持する組織・制度を安定的に有しているという意味での「教団」の成立は歴史的に言えばまだなく、それが実現するのは戦国期、本願寺蓮如の時代以降のことであった。[3] 金龍静氏によれば、本願寺蓮如

（一四一五―九九）はその宗教活動において、本尊を阿弥陀如来一仏とし、宗祖を親鸞とする「教団」の形成を志向し、強力に推し進めていった。[4] それは蓮如以前のありかたを大きく批判的に継承するとともに、蓮如以降のありかたを大きく規定し、方向づけるものであった。

この捉え方においては、のちに浄土真宗の祖と位置づけられる親鸞の没後、本願寺蓮如の時代に至る以前の時代を「初期真宗」と呼び、その時代のいわゆる「真宗」勢力の歴史的実態は「門流」形態と説明されることになる。そして、その「門流」形態から「教団」形成へと向かったのが本願寺蓮如の歴史的意義である。そして蓮如を継承した本願寺実如（一四五八―一五二五）期の教団の動きも重要である。この点を以下、三節に分けて論じる。

第一節　初期真宗「門流」をめぐって

（一）初期真宗「門流」の展開

『歎異抄』第六条[5]の「親鸞ハ弟子一人モモタスサフラウ」はとてもよく知られた言葉であるが、それはあくまで親鸞本人の宗教的自覚であって、実際には親鸞を師と仰ぐ門弟（門徒）集団（門流）が歴史的に存在した。[6] 主な集団としては、関東に始源・拠点を持つ横曽根門流、高田門流、大網門流、鹿島門流、また三河和田門流などが挙げられるが、さらに多くの親鸞直弟子とその門流、そして師資相承、法脈継承が繰り返されて分流し、広域的・拡散的な展開を見せた。ただし、当代師僧との関係を基本とする「門流」形態においては師資（法脈）相承を繰り返す

と先師の存在感は薄れ、当代師僧の中に包摂されていく傾向を持つ。そのため、親鸞が確固たる祖師として位置づけられず、したがって、もちろん「浄土真宗」としての宗派・教団意識などはなく、その成立もない。客観的に見れば、天台系の念仏聖集団の活動として捉えられたであろう。かつて井上鋭夫は汎浄土教系的性格を持つと指摘している。[7] 親鸞墓所としての本願寺は成立したが、覚如（親鸞ひ孫）や存覚（覚如長男）の動きは注意されるものの、本願寺への結集は必ずしもなしえてはいないのがこの時期の歴史的実態である。

初期真宗の諸門流は、関東から各地へと拡散的に展開し、とくに山間部に広がりながら北信越方面へ、また鎌倉街道をはじめとする街道筋や水運を用いて遠江・信濃から三河に入っていく。そこで一定度の定着をみながら、さらに矢作川流域を下り、知多半島を通って伊勢湾に出て、尾張木曾三川流域を北上していく動き、伊勢湾から南伊勢に入り大和へと展開した痕跡がある。信濃から美濃・尾張に入る展開もあり、そこからさらに北陸越前方面へ、畿内から西国地域への動きもみられる。[8]

以上は主に三河・尾張地域を中心に説明したもので、全国的にはさらに多様な展開があるが、この中で、とくに注目すべきは、高田専修寺門流はもちろんながら、それ以上に専信房専海門流と光信房源海門流である。この二門流は高田門流と同一視されることもあるが、明らかに独自の歴史的性格と地域的展開を持っている。専信は高田顕智よりも上位の親鸞直弟子で『教行信証』書写と御影（のちの安城御影）所持を許されている。その門流は前述の関東から遠江、そして三河へ、さらに北陸越前へと展開していったことが、各地に伝存する高僧連坐像から示唆される。[9]

荒木門流はしばしば荒木門徒とも呼ばれ、武蔵国荒木を拠点とした源海を祖とする門流集団である。[10] 源海の師は真仏で、これを高田門流の真仏とするのが一般的であるが、別の真仏とする説もある。[11]

荒木門流は、初期真宗門流の特徴をもっともよく示し、実は最大規模を有していた可能性がある。その布教形態は、掛幅・絵画をよく用い、絵解き・物語りをよくしたと考えられている。[12] また、その担い手は、「山の民」「川の民」[13]と呼ばれるような非農業民・非定住民が中心で、また夫婦（男女）・家族での信仰がよく見出される。[14] こうした担い手の民衆性がそのまま初期真宗の社会的位置を示すともいえる。

この門流の系譜に連なる人びとは多彩で、西国にその痕跡の豊かな明光や、佛光寺を開いていく了源などがいる。[15] とくに佛光寺は、『本福寺由来記』に「シルタニ佛光寺コソ、名張エケイツノ比ニテ、人民クンシフシテ、コレニコソル」[16]と語られ、名帳・一流相承系図（絵系図）を用いた民衆布教により繁栄したといわれ、蓮如以前の本願寺が同書では「人セキタヘテ、参詣ノ人一人モミサセタマハス、サヒ〳〵トスミテオハシマス」[17]とされて、よく対照的に示される。実際には本願寺も蓮如以前、北陸への教線伸長、近江門徒の獲得などの発展的動向も見せるのであるが、大きく勢力関係が動くのはやはり蓮如の時代になってからである。ただし、そこで衝撃的なのは、山科本願寺を建立・再興した蓮如に、佛光寺住職の経豪本人が帰依し、大多数を連れて本願寺教団に参入したとされることである。[18] 佛光寺の信仰・布教形態は蓮如からすれば克服すべき内容を持っていたが、佛光寺が民衆性を強く持つこと、そうした佛光寺の民衆性をも包摂することのできた蓮如の宗教活動をよく考えなくてはならない。

（二）初期真宗「門流」信仰の問題

こうした門流集団の地域的展開は、各地に伝存する法宝物史料からうかがえる。『改邪鈔』第二条[19]によれば、親鸞は十字名号（帰命盡十方无导光如来）を根本の本尊としたといい、実際に本人の直筆名号が残っているが、初期真宗の本尊は紺地金泥の十字名号・九字名号（南无不可思議光如来）、光明本尊や高僧連坐像、聖徳太子像など多様であった。太子像は十六歳孝養像、二歳南無仏像を中心に伝存し、真宗と太子信仰の深い関わりを示唆する。また、聖徳太子絵伝や善光寺如来絵伝、法然絵伝・親鸞絵伝なども、初期真宗の特徴的な法宝物である。さらには、前述のように、佛光寺系の名帳・一流相承系図も外して考えることはできない。

こうした法宝物（礼拝対象）の多様さは、そのまま初期真宗時代の本尊や信仰の歴史的特徴を確かに示しており、歴史的理解を進めていく必要がある。絵画史料としての歴史的価値も高く、すでに多角的な研究課題が見出されている。[20]ただし、浄土真宗の本尊とは何か、宗祖は誰かという視点に立った時、次のような問題を持つことも確かである。

光明本尊は、浄土真宗において重要な存在を大きな一幅に収め切って礼拝対象としているのであるが、名号を中心には置くものの、さらに二つの名号、阿弥陀・釈迦の両絵像、天竺・晨旦・和朝の高僧、聖徳太子とその眷属、法然とその高弟、そして親鸞とそれ以後の先徳も描いている。すべてが名号の光明内に摂め取られて描かれているともいえるが、それぞれが同格の礼拝対象と見なされた可能性があり、本尊と宗祖の唯一性は表現されていない。親鸞は連坐像の流れの中に描かれ、その独自性は示されていない。

高僧連坐像も同様に親鸞を流れの中に描き、その始発は善導で、そこから法然、親鸞という法脈相承を描き示す。そこに阿弥陀如来（名号・絵像）は描かれないので、この高僧連坐像を礼拝対象とすれば、仏ではなく人師を礼拝し、信仰していることになる。聖徳太子もまた観音菩薩の化身ではあるが、本尊として礼拝すれば、阿弥陀如来を中心とした信仰ではないことになる。

こうした初期真宗の信仰形態に対して、蓮如は本願寺を継職して以降、あくまで本尊は阿弥陀如来、宗祖は親鸞という基軸をもって、活動していくことになる。そこでは「アマタ御流ニソムキ候本尊以下、御風呂ノタヒコトニヤカセラレ候」[21]という行為すら伝えられるが、もっとも克服すべき課題としたのは、善知識（人師）信仰と法脈相承であったと考えられる[22]。中世仏教の基本的な特徴でもあったそれらを乗り越えることで、蓮如は「門流」から「教団」へと転換していったのである。

第二節　本願寺蓮如の歴史的意義

蓮如は、鎌倉時代に親鸞が開いた浄土真宗の教えを、戦国時代に多くの人びとに説きひろめ、広範な民衆的基盤をもって浄土真宗・本願寺教団を形成し、社会的に定着させていった。この点がもっとも大きな歴史的意義である。本願寺を中心とする「教団」形成を日本仏教史上、現代的な意味での「宗派」を成立させていったさきがけであったともいわれる[23]。以下、あらためて蓮如の生涯を簡潔に追い、さらに蓮如の宗教活動とその特徴について、論点を

整理したい。[24]

（一）本願寺蓮如の生涯

八十五年にわたる本願寺蓮如の生涯について、先行研究を踏まえ、次の六区分にわけてごく簡単にたどる。[25]

(1)誕生～継職　…　蓮如は応永二十二（一四一五）年、京都東山大谷本願寺において存如の長男として生まれた。六歳で実母と生き別れ、十七歳で得度し、四十三歳で継職するまで長く後継者の立場で活動した。この時期に父存如のもとで聖教の書写・執筆活動を行い、それが蓮如教学の基礎となっている。長禄元（一四五七）年、存如の逝去に伴い、本願寺住職となる。この時、異母弟応玄と継職をめぐる相論があった。存如正室如円尼が支持した応玄に決まりかけたところ、北陸より叔父如乗が本願寺に参じて蓮如を支持し、蓮如の継職が決まったという。なお、蓮如は自身を本願寺七代と認識していた。[26]

(2)宗教活動の開始　…　本願寺住職となった蓮如は、親鸞の思想に基づき、真宗の本尊が阿弥陀如来であることを再確認する。それを掛軸装の紺地金泥十字名号であらわし、本尊として本願寺門徒に授与した。これをうけた近江国の堅田法住や、金森道西らが蓮如に帰依した初期の有力門徒であった。蓮如は道西の求めに応じて『正信偈大意』を著し、また『御文』を書き始める。こうして近江・北陸、そして東海地域に本願寺の教線は伸びたが、急速な勢力拡大が問題視され、また本尊を阿弥陀一仏と明確にすることが他の仏神への軽視ととられ、比叡山延暦寺の警戒を招くことになった。

(3)「寛正の法難」とその後　…　寛正六（一四六五）年、延暦寺衆徒が東山大谷に押し寄せ、本願寺は破却された。蓮如は抵抗せずに逃れたが、翌年には延暦寺衆徒の攻撃を受けた金森門徒が初めて軍事的に抗戦し、相手方の大将を討ち取っている。これが史上初の一向一揆といわれる。応仁元（一四六七）年、延暦寺は本願寺を赦免し、これまで青蓮院門跡の「候仁」（候人）であった本願寺は延暦寺西塔院の末寺と位置付けられた。[27] この赦免交渉に関して三河国の佐々木如光の尽力があったという。そのつながりで翌年、蓮如が三河に来訪したのであろう。この頃、蓮如は十字名号に替え六字名号（南無阿弥陀仏）を用い出すようになる。

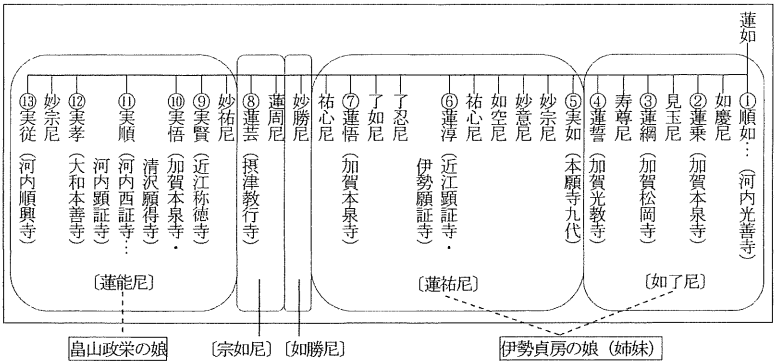
(4)北陸吉崎時代　…　文明三（一四七一）年、蓮如は親戚筋にあたる興福寺大乗院経覚の勧めもあって、北陸に下向し、越前と加賀の国境にある吉崎に坊舎を建立し居住した。隠居するかたちであったが、六字名号や『御文』などを用いて蓮如がわかりやすく説く浄土真宗の教えを聞きたいと民衆が吉崎に群集したため、北陸でも、天台宗の平泉寺・豊原寺や真宗高田派からまたも警戒を受けることになる。そして、文明六（一四七四）年には加賀国の守護富樫家の内紛に本願寺門徒が関与し、一向一揆が勃発する（文明一揆）。さらに翌年にも軍事的紛争が続いたため、蓮如は吉崎を退去して畿内に帰還する。

(5)山科本願寺建立　…　蓮如の残された人生最後の志願として本願寺の再興があった。文明十（一四七八）年、蓮如は河内国出口から山城国山科郷野村に入り、坊舎の造営事業を始める。文明十二（一四八〇）年には御影堂を建立し、近江国三井寺に預けていた親鸞木像（御真影）を迎えて報恩講を勤修する。文明十五（一四八三）年には阿弥陀堂も完成し、山科本願寺が成立するが、同年には本願寺住職をしていた長男順如の先逝という悲痛もあった。

この頃、佛光寺経豪が蓮如に帰依したことをはじめ真宗諸派の参入が相次ぎ、本願寺教団はさらに勢力を拡大し、全国教団化が進む。

(6)晩年、そして往生　…　順如の先逝により再び本願寺住職の役割を担った蓮如であったが、長享二（一四八八）年には加賀国で再び一向一揆が勃発する（長享一揆）。守護富樫政親を攻撃して勝利した本願寺門徒勢は以後、百年にわたり加賀国を実質的に統治していくことになる。ただし、この一件の責任を室町幕府に問われた蓮如は翌延徳元（一四八九）年に隠居し、五男実如が本願寺住職となる。明応五（一四九六）年には隠居所として摂津国大坂に坊舎を建立するが、やはり山科で最期を迎えるべきと考え、山科本願寺の南殿において明応八（一四九九）年三月二十五日、蓮如は八十五歳でその生涯を終えた。

以上はまったくの略述であるが、必要な要点は押さえてある。もう一つだけ特筆しておきたいのは、よく知られたことではあるが、蓮如はその生涯で五人の妻を持ち（いずれも死別後の再婚）、二十七子（十三男・十四女）をなしたことである（**下掲図版**）。十三人の男子はそれぞれ教団において重要な役割を担い、十四人の女子も含めて、諸方と婚姻関係を結んで



図版「蓮如妻子関係図」

縁戚の世界を広げ、そのことが戦国期本願寺教団の社会的地位の獲得に大きな役割を果たしていくことになるのである。

（二）本願寺蓮如の宗教活動―その歴史的特徴

次に、蓮如が浄土真宗の教えをどのように伝えていったのか。やはり先行研究の論点、とくに金龍静氏の研究[28]を継承しながら、その宗教活動の歴史的特徴を考える。

(A)本尊　…　蓮如は、親鸞の思想に基づき、浄土真宗の本尊が阿弥陀如来ただ一仏であることをあらためて明確にした。蓮如以前の初期真宗門流の時代においては必ずしもそのことがはっきりしておらず、多様な本尊が用いられていたが、蓮如によって形成された本願寺教団においては本尊の統一がなされていく。本尊にも木像、絵像、名号などがあったが、蓮如は特に名号を重んじて用いた。[29]

〔名号〕文字で仏の名をあらわす名号には十字（帰命盡十方无导光如来）・九字（南無不可思議光如来）・六字（南無阿弥陀仏）などがあり、「寛正の法難」以前の蓮如は紺地金泥十字名号を用いたが、その後は数え切れないほど多くの六字名号を手書きで製作した。そこには出遇った門徒一人ひとりに本尊を授けたいという蓮如の意図があるのではないか。なお、名号は蓮如の後を継いだ実如ら本願寺歴代もよくあらわしている。

〔絵像〕門徒が増加し、地域に門徒集団が寄り合う道場（後の寺院）ができると、その道場本尊として方便法身尊像（阿弥陀如来絵像）が授与された。軸裏には何（方便法身尊像）を誰（蓮如ら本願寺住職）がいつ（年月日）ど

こ（地域）の誰（願主）に授与したかが記され（裏書）、本願寺と門徒の宗教的な結び付きを示している。こうした絵像本尊の授与は蓮如・順如期に本格的にはじまり、実如期にピークを迎える[30]。

(B)宗祖　…　蓮如は親鸞を宗祖とする宗派＝本願寺教団を形成した。それ以前は汎浄土教的性格が強く、善導―法然―親鸞から始まる師資相承によって法脈を受け継いでいく門流のかたちをとっていたが、蓮如は宗祖とする親鸞に直参してその教えを直接的に聞く姿勢を明確にし、門徒にもそれを促した。なお、蓮如は二度、親鸞の寿像である安城御影を修復し、安城御影にならった親鸞影像を制作し授与しだしている。

〔正信偈・和讃〕文明五（一四七三）年三月、蓮如は『正信偈』『三帖和讃』を開版した。従来の勤行では善導の『六時礼讃』が主に用いられてきたとされるが、これ以降は宗祖である親鸞が撰述した「帰命無量寿如来」からはじまる七言一二〇句の『正信偈』と『三帖和讃』が本願寺門徒の勤行の中心となっていった。もっとも門徒の多くは文字ではなく口承でその内容を覚え、朝夕の勤行をしたと考えられる。

〔報恩講〕そして同年十一月、蓮如は親鸞正忌を「報恩講」と称して執行し、これを教団の中心法要と位置付けていく[31]。そこでは他力の信心を確かに獲得することが真実の報恩謝徳の営みとされた。さらに文明十二（一四八〇）年からは「御影前」（御影堂内の親鸞木像の前）における「改悔」儀式が始められた。これは法要に参詣する僧侶・門徒による信仰告白儀式であった。また、斎・非時（食事）の場が設けられ、これを調進することが門徒の大切な宗教役であった。

(C)講・寄合　…　蓮如は教化の場として講・寄合を重視した。中世真宗の講は未成熟であったという見解はあるも

のの寄合は確かに存在し[32]、名称はともかく、門徒が寄り合って儀式を行い、仏法を語り合う場は確かに存在した。それは日常的な生活の場がそのまま仏法の場となるものであった。村落内規模のものから広範な地域にわたるものまであるが、いずれにせよ、僧侶・門徒による講・寄合という地域的結合が本願寺教団の重要な基盤となった。

〔談合〕「仏法は一人居てよろこぶ法也。一人居てさえとうときに、二人よりあわば、いかほどかありがたかるべき。仏法をば、ただ、よりあいよりあい、談合申すべき[33]」という言葉が伝えられるように、門徒同士で仏法を語り合うこと（談合）の大切さを蓮如は説いた。その中で信心が確かめられ深められていくとともに、人的関係も構築されていったのである。

〔御文〕名号とともに蓮如の教化の大きな特徴とされるのが『御文』である。消息形式の仮名法語といわれる『御文』は、浄土真宗の教えの内容を当時の言葉でわかりやすく記し、説くものである。勤行後などに拝読され、聴聞する門徒民衆はその音声を耳で聞いて教えを体感していった。蓮如の『御文』は二〇〇通以上あるといわれるが、後に『五帖御文』八〇通がまとめられ、その拝読を通じて、さらに教えはひろまった。

以上のような本願寺蓮如の歴史的意義は、実は生前の事績にとどまらない。蓮如が説いた浄土真宗の教えにより戦国乱世を生き抜く力をつけた門徒民衆は、蓮如を慕い、憶い続け、彼が残した名号や『御文』を通じて、浄土真宗の教えを次世代に伝えた。そしてそれが地域社会に定着し、現代にまで伝え続けられてきたという点がまた根本的に重要である。その意味で蓮如伝承・信仰の世界が重要な問題であるが、ここではその研究課題には踏み込まず、次節では直接的に蓮如を継承した次代の実如の諸問題へと視点を移していくことにしたい。

第三節　本願寺実如期という課題

本願寺実如は蓮如を忠実に継承したという視点[34]もあれば、実如自身に大きな意図と実践があったという視点[35]もある。いずれにしても、戦国期本願寺教団の歴史的形成を考える際、一般的によく注目される蓮如のみを評価して終わってはならず、むしろ実如期にこそ焦点を当てて検討する必要がある。

実如の生涯を金龍静氏は少青年期、継職併存期、単独宗主期、円如執権期、晩年期に分けて捉えている[36]。綿密なその区分を前提的理解として持ちながらも、本願寺住持に在職している時期を中心に大きく分けると、永正年間前半の戦乱動揺期、永正年間後半の教団整備期というように見ることも可能であろう。

永正三年（一五〇六）に起こった全国的動乱の中で、本願寺実如は河内錯乱に関与し、室町幕府管領の細川政元の要請を断れず、初めて自身の指令による一向一揆の発動へと踏み込んだが、摂津・河内門徒には拒まれ、加賀門徒を動員することになった。さらに北陸で一向一揆が戦われる一方で、大坂では実如の代わりに弟実賢を宗主に擁立しようとする動きが起こるに至ったが（大坂一乱）、この事件は実賢の大坂御坊退出によりひとまず沈静化する。しかし、このことは実如の本願寺住職（宗主）権力の不安定さを露呈する事件であった。

そのため、永正年間後半になると、実如は後継ぎの円如の補佐を受けつつ、さまざまに教団の支配体制を強化していくことになる。一つには金龍氏が永正三法令と呼ぶ「三箇条掟」（攻戦・防戦・具足懸）、「一門一家衆制度」、

「新坊建立停止令」の制定により、一向一揆の禁止と地域における「寺内」の軍事拠点化の抑制、増えすぎた「一家衆」（本願寺親族集団）の階梯的整理を行い、教団内外における政治的な体制強化に取り組んでいる。[37] もう一つには、蓮如の『御文』を聖教化して『五帖御文』を編纂し、また年中行事の体制強化もしている。[38]

ところが、実如を支えていた円如が大永元年（一五二一）に没し、さらに北陸でまた一向一揆が勃発し、実如自身も大永五年（一五二五）に六十八歳で没していくことになる。後を継いだのは数え十歳の孫、証如であった。

こうした実如期本願寺の社会的位置の問題を考えるために必要な議論をここでは以下、三点に絞って提示する。

（一）方便法身尊像の授与

とくに戦国期の本願寺は本山寺院として、教団に所属せんとする各地の真宗道場・寺院に、絵像本尊として「方便法身尊像（形）」と表記される阿弥陀如来絵像を授与した。それは蓮如期に本格化し、実如期に最盛期を迎える。蓮如以前にもわずかにみられ、実如期以降も証如・顕如期から近世に至るまで確認されるが、実如期がもっとも多いということは、まさしくこの時期に本願寺教団が全国的展開・発展を見せ、広範な民衆的教団基盤を構築したということである。実如が授与した方便法身尊像は、北は蝦夷、南は薩摩まで見出され、総点数はいまだ把握しきれない。金龍氏の研究段階（二〇〇〇年）で九百五十点ほどといい、[39] それ以降も調査研究によって発見が続いているので、[40] すでに一千点は越え、なお増え続けることが確実である。

こうした絵像本尊には裏書があるのが基本で、そこには前述のように①何を、②誰（本願寺歴代）が、③いつ、

④どこの⑤誰に授けたかという文字情報が記されている。[41] 真宗の法宝物にある裏書の史料的価値は絶大であるが、ここではこうした絵像本尊の授与、裏書という形での宗教的関係の契約明示によって、本山である本願寺と地域の有力な門徒民衆が宗教的紐帯を持ち、戦国期本願寺教団の形成が強固に進展したという点をとくに強調しておきたい。一言に門徒民衆と言っても、蓮如期の近江堅田の法住、同金森の道西、三河佐々木の如光らの歴史的実態を見れば、彼らは商工業に関わってかなりの経済力を持つ地域有力者である。[42] 蓮如に山科野村の地を寄進した海老名五郎左衛門（法名浄乗）は山科七郷の有力な郷民でありかつ門徒化した存在で、[43] こうした人びとが全国各地で門徒化していく状況があったということである。

本願寺が制作し授与する方便法身尊像は画相が定型化し、絵画史料としての多彩さには欠けるのであるが、来迎を基本とする一般的な阿弥陀信仰と異なり、明らかに本願寺流の信仰を表現し、指し示している。受け取る側も多様であろうが、何でもよいわけではなく、急速に同じ本願寺流の絵像本尊が全国各地に多数、流布していくこと自体、その社会的基盤を考える際に重要な問題として指摘しておかなくてはならない。

（二）山科本願寺・寺内町の形成

寺内町とは、とくに真宗寺院の「寺内」であることを根拠に諸役免除や守護不入などの権利を獲得し、周囲に堀や土塁を築いて、その中に町場を形成する都市・集落である。[44] 真宗史のみならず、政治史・経済史・都市史・地理学・考古学など学際的に注目され、研究も相当に蓄積されたが、その中で歴史上、初めての本格的な寺内町が山科

本願寺において形成されたことは誰もが疑わないことである。

ただし、寺内町の建設についても、従来は蓮如の業績として語られることが多く、実際には段階的な形成であること、とりわけ、町場の拡大や土塁の構築に関しては、それが実如期であることはあまり注目されていない。この点を丁寧に検討したのが草野顕之氏の研究である。[45] 草野氏は、山科本願寺の創建期には政治的危機がなく、防御を考えない平地にあって当初の囲いは築地塀であったが、蓮如晩年の加賀長享一向一揆後に土塁に変更されたと推測する。また、蓮如期には山科寺内町のいわゆる第一郭（御本寺）のみであったのが、実如期の永正初年頃に第二郭（内寺内）、永正十年（一五一三）頃に第三郭（外寺内）が普請され、形成されていった可能性が高いという。

これらの理由や背景については教団内の問題のみならず、当該期の政治的・軍事的情勢とも連関させてさらに検討しなくてはならないが、永正二年（一五〇五）に山城守護代の香西元長と対峙した室町幕府管領の細川政元が山科本願寺に軍勢を動かし、[46] おそらく寺内町に入っている。第二郭が形成され、細川方の軍事拠点として機能し出しているのであり、これが翌年の河内錯乱にあたって政元が実如の一向一揆の軍勢動員を要請することにつながるのであろう。永正十年は室町将軍足利義稙が五月に京都帰還を果たしているが、その段階でまだ普請は行われていない。[47] 第三郭の形成はただ山科本願寺の勢力拡大のみを背景とするのかもしれないが、義稙帰洛時に山科の葬所の無常堂を布で隠す逸話[48]と連関させれば、蓮如墓所もある寺内町北東の葬所を包みつつ、主に北側の街道方面を軍事的に強化したと捉えることはできよう。[49]

寺内町には本願寺門徒のみならず非門徒も集住し、活発に経済活動が行われたと考えられている。[50] 山科に限れば

直接的な史料は少ないが[51]、考古学の調査においても多量の輸入陶磁器が発掘されて山科本願寺・寺内町の富裕を裏付けている[52]。まさしく天文元年（一五三二）の焼失時に「及四、五代富貴誇栄花、寺中広大無辺、荘厳只如仏国云々、在家又不異洛中也、居住之者各富貴、仍家々嗜随分之美麗云々[53]」と公家鷲尾隆康に記録され、財宝が山のごとくあったとされることと合致しよう。

山科本願寺は寺内町という場を形成することで、政治的・軍事的・経済的力量を持ち、それを増幅させた。その分、政治的危機も増えていくことになるが、社会的地位の上昇も図られた。こうした歴史的性格は次の大坂本願寺とその寺内町にも継承され、さらに勢力を拡大することになる。

（三）天皇・青蓮院門跡との関係

本願寺と天皇・青蓮院門跡との関係については伝説的な内容も多く慎重に考えていく必要があるが、山科本願寺については、朝廷や室町幕府とかなりの折衝を行い、周知の上で建立を実現させている。蓮如が『御俗姓御文』で親鸞の出自を説き直し、さらに文明十三年の『御文』では本願寺が亀山天皇・伏見天皇の時代より勅願所であったという由緒が強調されている[54]。本願寺自体はいわゆる「寛正の法難」以後に比叡山延暦寺三塔の一つ西塔院の末寺となって末寺銭を払うことになったが、寺格としては青蓮院門跡の「候仁」（候人）であった[55]。それが山科本願寺・寺内町の勢力拡大と強い経済力を背景に上昇を図っていくことになる。実如期においては実質的に青蓮院の外様院家格の位置を占め出しているようであるが、さらに次の動きを見せる。

一つ目は永正十一年（一五一四）、後柏原天皇皇子の清彦親王（のちの青蓮院尊鎮）の得度料が不足していたところ、実如が二千疋を進納し、香袈裟の着用を許可されたというものである。実如はさらに香袈裟免許の礼銭として別に五千疋も進上している。[56]

二つ目は永正十五年（一五一八）、今度は青蓮院尊鎮（清彦親王）の受戒料について実如が一万疋を進納し、これに対して実如が尊鎮より五箇条（①若年より三方膳の事、②袈裟浮紋の事、③僧綱以後、紫袈裟着用あるべき事、④香鈍色の事、⑤生裳の事）の内容を許可されたことである。[57]

三つ目は大永元年（一五二一）、後柏原天皇の即位料を実如が調進したとされることである。これには三条西実隆の仲介があったという。[58]

以上の事項については先行研究でも触れられているが、[59]あらためてその意味は、戦国期本願寺教団の社会的位置を確保していく歴史的な流れの中で重要である。こうした動きは蓮如期に確認されず、実如期に至って始まるものである。そして、それは次代の証如・顕如期になるとさらに活発となるのである。

おわりに

本稿では、本願寺蓮如の歴史的意義として論じられることの多い戦国期本願寺「教団」の形成について、その前後にも射程を広げて論じてきた。前提となる初期真宗門流の時代については、その歴史的実態の解明自体、さらな

る課題であるが、ここでは蓮如が本願寺教団を形成するにあたって、克服すべき問題があったことを確かめた。本願寺蓮如の活動については、それこそ本稿の紙幅で論じきれる問題ではないが、金龍氏の見解に基づき、筆者なりの見解を加えて整理を提示した。そして、蓮如の後継者である実如期についても、実はこの時代とそれ以降に欠けて、戦国期本願寺「教団」の本格的な形成過程があったという見通しを持って論点を確かめた。

なお、本稿の内容は、別に論じた戦国期本願寺の「報恩講」儀式と教団内編成の問題[60]と併せて捉えた時、その理解はさらに深まるものであることを付記しておきたい。

注

(1) 金龍静『蓮如』(吉川弘文館、一九九七年)、同朋大学仏教文化研究所編『蓮如方便法身尊像の研究』(法藏館、二〇〇三年)など。

(2) 初期真宗史(原始真宗史・初期教団史)に関する先行研究については蓄積がありすぎて、ここですべてを掲出することは不可能である。以下の注において比較的近年の代表的な研究を挙げる。

(3) 草野顕之『戦国期本願寺教団史の研究』(法藏館、二〇〇四年)。

(4) 前掲注(1)金龍著書など。

(5) 『真宗史料集成』(以下『集成』)第一巻(同朋舎、一九七四年)五〇三頁。

(6) 拙稿「関東門弟 親鸞書状にみる門弟の動向」(同朋大学仏教文化研究所編『誰も書かなかった親鸞「伝絵」の真実』法藏館、二〇一〇年)。

(7) 井上鋭夫『一向一揆の研究』(吉川弘文館、一九六八年)。

(8) こうした初期真宗の歴史的実態について、筆者はこれまでに関与した自治体史事業の『新編安城市史1通史編 原始・古代・中世』(安城市、二〇〇七年)、『愛知県史 通史編2中世1』(愛知県、二〇一八年)において論及した。拙稿「中世知

多半島地域における真宗勢力の展開」（『愛知県史研究』第一二号、二〇〇八年）、拙稿「三河と播磨をつなぐ南伊勢の真宗」（『真宗研究』第五八輯、二〇一四年）なども参照。

(9) 脊古真哉「専海系三河門流の北陸への展開―高僧連坐影像二点の紹介によせて―」（早島有毅編『親鸞門流の世界　絵画と文献からの再検討』法藏館、二〇〇八年）など。

(10) 脊古真哉「荒木満福寺考―満福寺歴代の復元と源海系荒木門流の拡散―」（『寺院史研究』第一一号、二〇〇七年）など。

(11) 早島有毅「中世社会における親鸞門流の存在形態―中太郎真仏を祖とする集団を中心として―」（『真宗重宝聚英』第八巻、同朋舎、一九八八年）。

(12) 塩谷菊美『語られた親鸞』（法藏館、二〇一一年）。

(13) 井上鋭夫『山の民・川の民―日本中世の生活と信仰』（平凡社、一九八一年。二〇〇七年にちくま学芸文庫より再刊）。

(14) 西口順子『中世の女性と仏教』（法藏館、二〇〇六年）、遠藤一『中世日本の仏教とジェンダー―真宗教団・肉食夫帯の坊守史論―』（明石書店、二〇〇六年）など。

(15) 佛光寺編『佛光寺の歴史と文化』（法藏館、二〇一一年）など。

(16) 『集成』第二巻（同朋舎出版、一九九一年改訂版）六六一頁、『大系真宗史料』（以下『大系』）文書記録編3戦国教団（法藏館、二〇一四年）一二六頁。

(17) 前掲注（16）同。なお、『本福寺跡書』では、「ソノ比、大谷殿様ハ、至テ参詣ノ諸人カツテオハセス、シカルニ、（シル）谷佛光寺、名帳・絵系図ノ比ニテ、人民雲霞ノ如コレニ挙、耳目ヲ驚ス」とある（『集成』第二巻六三一頁、『大系』文書記録編3戦国教団一六一頁）。

(18) 『反古裏書』（『集成』第二巻七五四頁、『大系』文書記録編3戦国教団五三―四、七九頁）。

(19) 『集成』第一巻（同朋舎、一九七四年）六五六頁。

(20) 小山正文『親鸞と真宗絵伝』（法藏館、二〇〇〇年）、津田徹英『中世真宗の美術（日本の美術第四八八号）』（至文堂、二〇〇六年）、前掲注（9）早島論集所収の諸論考、山田雅教「光明本尊の成立背景」（『日本宗教文化史研究』第二一巻一号（通巻四一号）、二〇一七年）など。

(21) 『蓮如上人一語記（実悟旧記）』一五八条（『集成』第二巻、同朋舎出版、一九九一年改訂版）四五九頁。

(22) 前掲注（8）自治体史（筆者執筆分）で文明年間の「異安心」事件に論及したが、そこでも問題点の一つに善知識信仰が浮かび上がってくる。
(23) 前掲注（1）金龍著書、金龍静「一向宗の宗派の成立」（『講座蓮如』第四巻、平凡社、一九九七年）など。
(24) 本節については拙稿「蓮如上人の生涯」（図録『應仁寺と三河の蓮如上人展』、碧南市藤井達吉現代美術館、二〇一八年）を改稿。
(25) 本願寺蓮如に関する先行研究もまたぼう大にありすぎて、すべて掲出することは不可能である。ここでは、前掲注（1）金龍著書、前掲注（3）草野著書第Ⅰ部第一章「蓮如の生涯」、神田千里『蓮如―乱世の民衆とともに歩んだ宗教者』（山川出版社、二〇一二年）のみ挙げておきたい。また、以下の注で示すのも比較的近年の研究成果の一部のみである。なお、史料的根拠もすべてに付すことは紙幅の関係上、困難なので、史料集として真宗大谷派教学研究所編『蓮如上人行実』（東本願寺出版部、一九九四年）を挙げるに留める。
(26) 吉田一彦「大谷本願寺第七世釈蓮如」（前掲注（9）早島論集）など。
(27) 大田壮一郎「初期本願寺と天台門跡寺院」（大阪真宗史研究会編『真宗教団の構造と地域社会』清文堂出版、二〇〇五年）、拙稿「戦国期の大坂本願寺教団と比叡山延暦寺―『天文日記』の検討を中心に―」（『同朋佛教』第五四号、二〇一八年）。
(28) 前掲注（1）金龍著書。
(29) 蓮如名号の研究については、同朋大学仏教文化研究所編『蓮如名号の研究』（法藏館、一九九八年）、青木馨『本願寺教団展開の基礎的研究 戦国期から近世へ』（法藏館、二〇一八年）の成果が絶大である。
(30) 前掲注（1）『蓮如方便法身尊像の研究』など。
(31) 拙稿「戦国期本願寺「報恩講」の歴史的確立」（『同朋大学論叢』第九七号、二〇一三年）。
(32) 前掲注（3）草野著書第Ⅰ部第四章「蓮如と講・寄合」における議論を参照。
(33) 『蓮如上人一語記（実悟旧記）』第一三六条（『集成』第二巻四五六頁）。
(34) 金龍静「実如の生涯」（同朋大学仏教文化研究所編『実如判五帖御文の研究―研究篇上』法藏館、二〇〇〇年）。
(35) 吉田一彦「実如の継職と初期の実如裏書方便法身尊像」（同朋大学仏教文化研究所編『実如判五帖御文の研究―研究篇下』法藏館、二〇〇〇年）

(36) 前掲注（34）金龍論文。
(37) 『富山県史』通史編Ⅱ中世（富山県、一九八四年）。
(38) 前掲注（34）金龍論文、前掲注（3）草野著書、岡村喜史「実如期の本願寺教団と御文の聖教化」（前掲注（34）『実如判五帖御文の研究―研究篇上』）など。
(39) 前掲注（34）金龍論文。
(40) 方便法身尊像については、吉田一彦氏と脊古真哉氏による精力的な調査研究の成果が前掲注（1）『蓮如方便法身尊像の研究』でまとめられ、さらに調査研究は進められている。筆者もまた同朋大学仏教文化研究所や関与する自治体史（愛知県史・安城市史・豊田市史・西尾市史・高浜市史）の調査研究活動において取り組んでいる。
(41) 『新修豊田市史6』資料編古代・中世（豊田市、二〇一七年）第十一節「真宗法宝物裏書史料集成」節扉解説（筆者執筆）。
(42) たとえば三河佐々木の如光については前掲注（8）自治体史（筆者執筆分）など。
(43) 原田正俊「戦国期の山科郷民と山科本願寺・朝廷」（津田秀夫先生古稀記念会編『封建社会と近代』〈同朋舎出版、一九八九年〉、のちに『蓮如大系』第五巻〈法藏館、一九九六年〉・『寺内町の研究』第二巻〈法藏館、一九九八年〉再録）。
(44) たとえば『寺内町の研究』全三巻（法藏館、一九九八年）。
(45) 前掲注（3）草野著書第Ⅰ部第六章「山科本願寺・寺内町の様相」・第七章「創建時山科本願寺の堂舎と土塁」。
(46) 『実隆公記』同年九月十日・十一日条（『大系』文書記録編5戦国期記録編年〈法藏館、二〇一四年〉八九頁）。
(47) 『本願寺作法之次第』第一四四条（『集成』第二巻五八二頁、『大系』文書記録編13儀式・故実〈法藏館、二〇一七年〉六八頁）。
(48) 前掲注（47）同。
(49) そうであるがゆえに、天文元年（一五三二）山科本願寺陥落時には北側ではなく南西側からの攻撃、侵入を許し、敗北したと考えることもできるであろう。
(50) 前掲注（43）『寺内町の研究』全三巻。
(51) 『本願寺作法之次第』第一七条より「魚売買」のあったことが指摘されたり、同第一〇八条より「絵師」の存在が見出されたりしている（『集成』第二巻五六五・五七七頁、『大系』文書記録編13儀式・故実四五・六二頁）。

(52) 柏田有香「発掘ニュース76山科本願寺のお宝」(リーフレット京都No.215、二〇〇六年)。
(53) 『二水記』天文元年八月二十三日条(『大系』文書記録編5戦国期記録編年一六二頁)。
(54) 『集成』第二巻二二六頁・二四三―五頁「諸文集」(一〇四)(一二一)。
(55) 前掲注(27)大田論文・拙稿。
(56) 以上、『桂蓮院宮御得度記』(『大系』文書記録編5戦国期記録編年一〇七―八頁)。
(57) 以上、『華頂要略』門主伝二十三(『大系』文書記録編5戦国期記録編年一一二―三頁)。
(58) 以上、『興福寺略年代記』(『大系』文書記録編5戦国期記録編年一一八頁)。
(59) 前掲注(3)草野著書第Ⅲ部第四章「戦国期の本願寺教団と天皇」、前掲注(34)金龍論文。
(60) 前掲注(31)拙稿ほか。

〔付記〕本論脱稿後に斎藤信行「真宗史における蓮如教団の位置」(『佛教史研究』第五五号、二〇一七年三月)の存在に気づいたが、その内容を反映させることができなかった。前半では金龍静氏の研究を丁寧に詳しく整理され、学ぶべき点が多々あったが、後半は結論が先にある論調で、残念としか言いようがない。